
テキストトーカー若松

神宮司コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テキストストーリーカー若松

【Nコード】

N3024I

【作者名】

神宮司コウ

【あらすじ】

言語学者若松が偶然見つけた羽ペン。それで文字を書くと、文字と会話することができるのだ。ひらがな「し」が投げかける悩みとは？

第1話（前書き）

初めまして、神宮司コウです。

手始めに、5話くらいで完結する短い話を投稿しようと思います。

第1話

重い腰をあげて机の整理をしていた時に、偶然にも羽ペンを見つけた。いつ、どこで買ったのか全く覚えがない。それ相応に年はとっているが、物忘れをするにはまだ早かろう。四十は超えても、大学で学生に熱弁をふるう元気は有り余っている。言語学者若松修二として、名をはせているのだよ。

自慢話はさておき、問題はこの羽ペンだ。一見、どこもおかしなところはない。一昔前に、少年魔法使いの物語がヒットしたが、彼の道具の類でないことは明かだ。試しに、インクを買ってきて、適当に文字を書いたが、何も起きやしない。

ところがだ。一仕事終えて、コーヒーを飲んでいると、どこからか溜息が聞こえてくるのだ。私専用の研究室にあり、学生を招いた覚えはない。密室に一人いると言ったほうが分かりやすいと思うが、重要なのは、私以外に人はいないということだ。

時間的に幽霊や妖怪が出てきてもおかしくはない。論文をまとめるのに、予想以上に時間がかかったからだ。私は、お化けの存在を信じるたちだが、実際に見たことはない。そして、霊感もない。それでも、空恐ろしくなって身震いをする。

嘆息が聞こえる方に耳を澄ます。すると、どうも机の上から発せられていることが分かった。はてな、机の上に座敷わらしでもお座りしているのかな。聞き耳をたてていると、ようやく、声の発生源にたどり着いた。

それは、どうも紙の上であるようだ。紙が口をきけるとは、有史上初めての発見である。いや、なにをバカなことを。紙がしゃべるわけあるまい。

「あーあ、どうして僕は、こうなんだろうな」

今度は明確に声が聞こえた。左右を目視するものの、やはり人はいない。つまりは、この紙がしゃべっているということか。

問題の紙をつかんで、ひらひらと振ってみる。

「やめてよ、酔っちゃうじゃないか」

紙が抗議してきた。そばにあった虫眼鏡で、じっと覗いてみる。しかし、先ほど羽ペンで書いた文字があるだけ。不審な点はない。首をかしげて、紙を机に放り投げる。

「おい、どうなってるんだ。真っ暗だよ、苦しいよ」

今度は、紙が呼吸困難に陥ったようだ。紙に鼻なんてあったらどうか。気の毒なので、そつと裏返してやる。

「ふう、助かった。死ぬかと思った」

「一体全体どうなってるんだ、紙がしゃべるなんて」

ここにきて私は、率直に疑問をぶつけた。その返答は、意外なものだった。

「紙がしゃべるわけじゃないじゃん。人間ってもつと賢いと思ってたんだけどな」

紙がしゃべっているのではないのか。だとすると、この声の主は何なのだろう。再び、部屋中を見渡す。しかし、あるのは本棚や置物といった無機物ばかり。この声は、紙が発しているとしたか思えないのだ。

第2話

「紙がしゃべっているんじゃないとすると、君は何者なんだい」

「もう、なんで気付かないのさ。僕は、ひらがなの『し』だよ」

その紙に書かれた文字の中に、確かに「し」が含まれていた。ひらがなで「しゅうじ」とあり、その中の「し」がしゃべっているというのか。

「こりや驚いたな。数十年生きてきたが、ひらがなと話したのは初めてだ」

「僕も、数百年存在してきたけど、人間と話したのは初めてだよ」

そもそも、文字と会話するという能力を身につけているなら、以前にこんなことがあってもおかしくないはずだ。だが、こんなことは、今回が初めてだ。会話している文字は、羽ペンで書いたということを除けば、数十年に渡って書いてきた文字となんら変わりはない。そうすると、この羽ペンには、不思議な力が宿っているのだろうか。

「ねえ、人間って、僕らの生みの親なんだよね」

「その通り。君のようなひらがなは、平安時代に生まれたと言われるな」

言語学者にとっては、常識の事柄だ。

「じゃあさ、僕の悩み聞いてくれないかな」

先ほどからため息をついていたのは、悩み事があるかららしい。

近頃は、間違った言葉づかいをする者が多いから、ひらがなにとっても気苦労が多いのだろう。どれ、言語学者として、相談にのろうではないか。

「僕ってさ、知らぬ間に人を傷つけたりしてるんだよね。だって、僕って『死』の読み方にもなってるじゃん。僕がいる限り、傷つく人があるのが、耐えられないんだ」

これは、予想以上に深刻な悩みだ。「死」ほど残酷な言葉はこの

世にないだろう。その読みを背負うという報われぬ運命。意気消沈するのもうなずける。

言語学的見地から考えようと思ったが、どうもこいつは私の手におえる問題ではないようだ。

「これは、哲学とかの分野の問題だね。さすがの私でも容易に答えを出すことはできなさそうだ」

「なんだよ、人間って大したことないじゃん」

そうしてまた溜息をつく。ひらがなにバカにされたのは心外である。とはいえ、具体的な解決案をおいそれと思いつかないのも事実だ。課せられた残酷な運命にどう立ち向かうか。私がもつと若かつたら、幾日も悩みぬけるだろうに。このままでは、気になって仕事に手がつかない。

「よし、ひらがなのことは、ひらがなに聞いてみることにしよう」
紙に書かれた「し」は微動だにしないが、相手側はなんらかの反応を示したに違いない。証拠に、溜息がぴたりと止んでいる。

私は、例の羽ペンを使って、「し」の隣に同じ大きさで「あ」と書いた。この羽ペンで他にも文字を書いたのだが、会話できたのはこの「し」だけ。つまり、この羽ペンで書いたからといって、必ずしもその文字と会話できるわけではないらしい。でも、今は、ひらがなの力が必要なのだ。長いこと人間生活を送ってきたが、ひらがなに助言を求めるなど初めての経験だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3024i/>

テキストトーカー若松

2010年10月11日12時33分発行